

東京都立産業技術高等専門学校
第一期第3回運営協力者会議議事録

- 日 時：平成23年12月7日（水）15:00 開会、17:00 閉会
- 場 所：東京都立産業技術高等専門学校荒川キャンパス 9階会議室
- 出席者：内田由美子委員、太田邦博委員、鈴木一哉委員、中村真一委員、
松田正雄委員、村西明委員、吉野学委員、
荒金校長、坂内事務局長、田原副校長、深山管理部長、渡辺教務主事、
齋藤教務主事、邊見学生主事、中島田学生主事
- 座 長：内田由美子委員
- 副座長：村西明委員
- 進 行：深山管理部長
- オブザーバー：杉山準様（富士通株式会社、国立釧路工業高専卒）

（挨拶）

主催挨拶

校長挨拶

法人事務局長挨拶

議事（概要）

議題1 平成22年度自己点検・評価について

（事務局から説明）

自己点検・評価の自己点検と評価に対するご意見について

（田原副校長から説明）

（運営協力者意見）

太田委員

全体の構成がわかりづらかった。自己点検の捉え方も抽象的でわかりづらい。

中村委員

我々がした外部評価は、目標に対する達成度の評価ではなく、結果が妥当であるかをチェックすることだと言うが、達成度の評価と自己点検評価の結果はどのように違うのか、具体的に教えて欲しい。

田原副校長

自己点検評価の目標としている将来像は、数値目標等はなく、将来こうあるべきだという姿を描いて、それに対して、その年度取組んだ内容を分析して、その結果を書いている。学校教育法に基づく機関別認証評価も教育機関が自分たちの目標を持ち、どう達成したかを自己分析する方法を取

っている。目標が達成できたか出来ないかではなくて、それを達成していくための自己点検評価がうまくできているかどうか、というもう一つ外側から判断して欲しい。

鈴木委員

仕組みが妥当かという意味か。

田原副校長

そうだ。この自己点検評価の仕組みが妥当か、ということの評価していただきたい。

鈴木委員

ISO の監査の方法も同じで、仕組みが妥当であれば、自分たちで決めた仕組みをまわせているかを現状の項目から評価して指摘すればいいということか。

田原副校長

その通りである。

太田委員

理念である将来像が、貴校にふさわしいのかという議論が一番大事だと思うが、この将来像を最初に評価しないといけないのか、それとも、仕組みが妥当かどうかだけを考えればいいのか。

田原副校長

将来像が正しいか否かではなく、将来像を目標として掲げ取り組み、その取り組みを回していくプロセスが妥当かを判断していただきたい。

太田委員

現在プロセスがまだないから評価できないということか。

田原副校長

自己点検評価をして、その結果をアクションプランに反映させていく作業は、別の作業として私どもがやらなければならないと思う。

太田委員

評価というより、ああそうですかというだけ。非常に曖昧で分かりづらい。

来年以降プロセスが入れば、プロセスを見て評価をすることができると思う。

鈴木委員

私は PDCA がきちんと回っているか、という指摘をさせていただいた。この自己評価を我々が評価するに当たって、PDC まではあるかもしれないけど A がない。となると本当に回っているかどうか、十分に評価しきれないと思う。行動計画も含めて活動内容についてご説明いただかないと、適切にコメントできないと思う。

将来像は「本校が本校として存続する価値・理由」みたいなもので、それを自分たちで作る、これは当然だと思う。次に「妥当かどうか検証する時に外部関係者の意見を反映させる仕組みを構築」と言っているが、外部関係者とは誰か。

田原副校長

将来像を作成する際にステークホルダーといわれる、学校を取り巻くいろいろな方々の意見を入れていくということは非常に重要なことだ。将来像は10年後を目途にしているが、新たな将来像の策定の際に、ステークホルダーの意見も取り入れていきたい。

鈴木委員

高専の将来像は、会社で考えたときに「会社が会社として存続する価値があるもの」である。つまり、高専が高専という形で存続する価値がある部分と、日本全体の学校教育の中で高専は解散してもいいが、こういうニーズがあるから東京都としては高専型の教育機関が必要なんだ、という話に分かれていくかだと思う。

田原副校長

将来像は「本校として変えない部分」がメインになってくると思う。本校が果たすべき役割というのは、中期目標や中期計画、つまり、東京都の施策の中で高等専門学校がどういう役割を果たすべきか、ということだが、これは東京都の考え方、あるいは、時代によって変わってくる部分だと考えている。

鈴木委員

その観点によって、意見を聞く人の範囲が変わってくるのだと思う。

松田委員

今の世の中は非常に厳しく、学校も生徒がなかなか集まらない、これからどういう教育をしたらいいのか、過渡期を迎え不安材料が一杯なのではと思う。社会全体が不況のどん底になっている。高専が立派なバスとして、いい教育をするからバスに乗りなさいと言い生徒が乗っても、バスの乗り方やどこに行き着いたらいいかが分からないような気がする。

将来像は、かなりよくできているのではないかと思う。

座長

将来像は、レベルの高いところに設定するのだと思う。これに向かって教育等していくものだと思う。今までの学校の説明でそう受け止めたが、この理解でいいか。

荒金校長

この将来像は、10年後をにらんでこういう学校にしていこう、というものを作った。ご指摘の通り、バスに乗って学生をどこに持っていくのか、ということについてはまだ明確ではない。当然のことながら、そこを決めなくてはいけないと思う。将来我々がどういう学生を育てるのかという部分をもう少し明確にしなければいけないと思う。

2番目の議題は、そういう観点で、今育てている学生と将来に向けて我々が育てる学生はどうすべきなのかということに関してご意見をいただき、肉付けしていきたいと思う。来年の9月までには、そういったビジョンをこの会議の中で提言いただき、こういう学生を育てて欲しいということこの会議のアウトプットとして、まとめていただきたいと思います。

中村委員

我々企業としても、実際に高専の学生に求めるものは、随分変わってきているのではないかと思います。高度成長経済の中で求めた技術者とは違う気がする。そのような中で、高校生と高専の卒業生と、学部卒業生と大学院卒業生と、企業は何を求めるのかといったときに、違いがなくなってきた。大学院を出た人にそんなに専門性があるかというところでもない。学部を出た人がどこまでの専門性で活躍してもらうかというのも、非常に微妙な感じだ。

高専生は、例えば、どちらかというところと研究開発設計、製造現場ではなく、その橋渡しをしてもらうようなエンジニアとして、職場要求に基づいて配属している。本当にそれでいいのか、とも思う。高専生はこういう技術を持っている、こういう風な人に育てているという今のメッセージ、それから10年後のメッセージというのを、もう少し具体的に行い、ものづくりをしている企業はそういう風な形で高専生を受け入れる。こういうところを明確にするといいのではないかと思います。

自己評価を読んだときにもものすごく抽象的だと思った。もっとオープンにして、作り上げていく過程の中でその都度の結果も含めて、全部見える形にしていくといいと思う。

田原副校長

今のご意見は、高専にとって非常に大事だと思う。というのは、教育界で考えると、戦前いろいろな複線型の教育機関があったが、戦後に教育システムが完全に一つになってしまった。その中で、昭和37年に、高等専門学校は初めて複線型の学校として設立された。

高専の設置目的は当初は明確で、「中堅技術者を育成する」こと、つまり日本の高度成長を支える中堅技術者を育成するために産業界からの要請に応じて作られた。それが50年の歴史の中で、教育界が大学、大学院と一本化されている中で、世の中の見方も、我々高専もそのような見方で高専を見るようになったのではないかと。

今後高専は技術者教育のどの部分を担って、どの階層、部分を輩出していくかということを明確に世の中に発信していくことが非常に重要であり、それが高専の存在理由だと考えている。

荒金校長

50年前は中堅技術者を育てるという事だったが、今は非常に錯綜している。中堅技術という人材を求めているのではないかと思います。逆に産業界から見て、高専に求める人材はこうだということを問題提起していただきたい。もちろん我々も考えなくては行けないが、本校としてどういう人材を育てていくかということのある程度見極めたいと思っている。

村西委員

この将来像を起点とした点検という手法は素晴らしいと思う。将来像自体が間違っていたり、今の時代に合っていないと、方向を完全に間違ってしまうが。

第2部での人材像については、高専卒業のエンジニアのマネージャーが出席しており、彼に後ほ

どお話しをしてもらいます。

鈴木委員

村西委員と中村委員の意見と違うことを述べる。オープンにするのはいいと思うが、皆の意見を聞いてはだめだと思う。私の会社では、創業の時の理念と考え方があるが、それに賛同できない人間は会社を辞めていいと言っている。変えてはいけないところは絶対譲らない。意見を聞いて変えるところと変えないところを明確に分けている。

オープンにして議論するのはいいと思うが、是非、学校としてここは変えないというところをしっかりと持って、それでオープンな議論をする、そういう進め方をして欲しい。高専は、他の学校の仕組みに比べれば特色のある学校で、その特色をどう生かすかということを見ると、平均的なものになってはいけないのではないかと思う。個人的な意見だが、是非、変えない部分と変えていい部分をしっかりと分けて、議論させていただければと思う。

中村委員

オープンにするというのは、皆の意見をまとめるということではなく、我々企業はどういう人材が輩出されるかに期待がある。それに対して我々はこういう人材を輩出するのだということを、その都度開示していただきたいという意味である。

太田委員

製造業の今後のあり方がどうなるのか、というのは大きな問題であり、そういうところに学生を輩出していくわけであるから、センシティブに情報を取っていただきたい。最近大学や大学院に向けてよく言われているのは、専門性に埋没しないで新しい世界を切り開く、どんどんチャレンジしていくような人材が欲しいということだ。先ほど言われたように、大学生、高校、高専生が、実はそんなに差がなくなって来ている。まして勉強しようと思えば、いくらでも自由が与えられている時代になってきている。その中でどういう風に、高専は高専のアイデンティティを示していくかということになると思う。

あえて言えば、ヒエラルキーの中に組み込むという考え方だけはしてはいけない。高専は中堅技術者だ等、そういうことをあまり押しつけるのではなく、その人材がどう伸びるかを見て、基本路線はきちんとしながら優秀な人間は伸ばしていく。個性を見出すということは必要だと思う。

ジョブスという人は、決して学者でも何でも無い。ある技術を上手にまとめて、お客様が欲しいものを作っていた。ありきたりの技術を組み合わせただけの会社になった。まさに、ああいう大きな会社の中でもいきいきとして、そういうようなことが考えられる人材を育てていくというのが高専の一つの理想ではないかと思う。

議題2 産業界から見た技術者像について

(荒金校長から議題提案理由説明)

(田原副校長から技術者像の策定について説明)

鈴木委員

「産業界から見た技術者像」というくくり方に特に異論はないが、企業の現場が一番求めるものは何かというと、少し次元が異なると思う。

わが社で言うと、若いエンジニアはメンタルが理由で会社を休んでしまう。技術者として一人前である条件として、「逃げずにやり遂げる」が挙げられる。これが出来て一人前だと思っている。

もう一つは、「逃げずにやり遂げる」前の段階で、チャレンジするかしないかという部分である。学校で教えられるのに慣れてしまった人間は、教えてくれるならその仕事をやるが、会社で教えてくれる人がいないと、手を挙げない。

ところが、ロボコン等を経験した学生は、すぐ自分でチャレンジする、自分で何かをやり遂げようというチャレンジをして逃げずにやり遂げる。自分で学んで、技術を身につけてやることがおもしろいと思うからで、勉強はしてきたが、ロボコン等を経験してこなかったという学生は、そういうところから逃げる。

こういう「基本的な気質」が、そこがベースの人間力なのかもしれないが、重要なのではないか。それさえあれば、あとはどうでもいいというくらいに思っている。そういう学生をどうやって発掘して採用するかだと思う。

それからもう一つは、これは教育では多分出来ないことだと思うが、好奇心と探求心をもっている人間を見つけて、そういう人たちに逃げずにやり遂げるといったしつけをしていくと、優秀な良いエンジニアが出来るのではないかと思っている。少しレベルが下のところでこそ、教育としてやっていくことが、まだいっぱいあるのではないかというのが私の意見だ。

荒金校長

今ご指摘いただいたところは、我々も議論している。タフな人間というか、好奇心、探求心、チャレンジ精神を持って逃げずにやり遂げる力等を育成していかなければならない。

松田委員

わが社では、2～3年ごとに仕事に変化している。加工技術が高度化し、現場での作業レベルが高くなっている。お客様から来る注文はすべてデータで来るので、図面が出来ても対応できない。海外へも全てデータで発信している。そういう変化が、ここ4～5年の間に急激に起こっており、学校の教育がそれに対応しているかどうか。

昔、職業訓練校で講師をしたことがあるが、その頃でも、現場の仕事と学校で教えている内容に差があった。今でも、おそらく職業訓練校では、かなり昔の方法でやっているのではないかと思っている。今の経済情勢の中では、即戦力を考えるので、例えば野球だと、高校を出てすぐに130キロの球を打つような選手が欲しい。学校の先生方もその辺をどのように認識しているのか。世の中の進歩が速すぎて、学校の教育とどれだけマッチしているのかと考える。

田原副校長

学校では、本当に古い旋盤とフライスで切削の基礎を教える教育をしている。ただ新しい機械などを扱える技術者としての素地、つまりこれをやったら危ない、これは絶対にやってはいけないということは、実際の機械を触ることによって、恐らく体得できていると思う。現場を知る機

会はいくつかあると思うが、一つは4年次のインターンシップで、産業界が実際に行っていることを体得する。2週間くらいだが、現場を見るだけでも恐らく価値はあると思う。

もう一つは、品川キャンパスで、中小企業同友会のメンバーに学校に来ていただいて、社長や責任者の方々が具体的なお話をしてくださる機会を設けている。こういったことは、実際の産業界を知るために学生にとっていい機会で、今後も必要だと考えている。

中村委員

先ほど説明のあった資料の中で、「ものづくりを支える実践的技術者の育成」と赤字で書いてあったが、ここの部分が非常に大事だと思う。ものづくりを支える、実践的技術者になってくれる人を是非育てていただきたい。

というのは、例えば機械工学を勉強してきた、電気工学を勉強してきたと言っても、トランジスタの形も知らない、はんだ付けの経験もないような人がほとんどである。実際に図面を描いて、ものを作っていくというところまでをしっかりと実践できるような技術者となってもらいたい。

今高専の場合、進学率はだいたい50%くらいと聞いている。専攻科に行って大学院に進学する学生、卒業後大学に編入する学生がいる。

高専の5年間の教育の中で本科を卒業して今のような実践的技術者を目指す人と、そういう進学を希望している人に対して行う教育と、この高専の中でどういう風に考えておられるのか。同じように育てるのか、それともそういう2種類の人っていて、上流指向の人と本科を出て技術者をを目指す人との教育の仕方の違いはあるのか。

田原副校長

本校でも専攻科を含めて進学率は40%だ。進学する学生と就職する学生の教育の内容を分けているということはしていない。

大学の1~2年を終わってくる学生と比べて、高専の5年間を終わって編入してくる学生は、課題に対して、例えば研究課題が与えられたときに、どうやって組み立ててどうすればいいかというやり方をもう知っているということで、大学の研究室からも評価されている。そのため、特に進学のためのカリキュラムや指導というのは行っていない。

中村委員

今後はどういう風に考えているのか。そこは変わらないのか。

田原副校長

いろいろな考え方があると思うが、私見では、大学とは違う技術者教育機関としての高専の役割は、外してはいけないと考えている。

我々の育てる卒業生が、大学で受け入れるのであれば、その道を選ぶ人がいてもかまわない。だが、我々はあくまで高専として、現場で実践的な技術者を、あるいは、今後国際的に活躍できる技術者というものが課題になってくると思うが、それを目指していくのが本筋だと思う。

大学は今、今後どう生きるか考えなさいといわれている。その中で、恐らく高専型の教育を目指す大学が出てくるのではないかと思われる。けれども、我々はまだアドバンテージを持っている。このアドバンテージを絶対に放すべきではないし、これが我々の長所になるのだと確信して

いる。

太田委員

大事な、実は一番核心になる話を、今、していると思う。

先ほど鈴木委員も言われたように、いかに興味を持ってもらうかということが、最初のモチベーションになる。特に高専というのは、現実と接するチャンスが多くあると思う。大学は座学が中心で、実験をやるにしても与えられて決められた実験しかやっていない。ところが、高専は意外と自由にいろいろなことに接することが出来る。そこで興味をたくさん持ってもらうということは、高専の大事な部分だと思っている。

自分を振り返ってみると、大学では、現実と学問のギャップを残したまま卒業している。これは何のためにやるのか、ということが分かっていない。現実にはこういうことが沢山あり、これはこういうことによって構成されている。だから、こういう学問が必要である。こういうものを作りたかったら、これをきちんとやるというようなところから始めると、現実と学問がつながるのではないか。

大学には全くない、興味を持たせるような仕組みをまず考えて行くと、ものに当たったときに対処が出来る、現実性が帯びてくるのではないかと思う。

松田委員

インターンシップで現場の声を学ぶ中で実現できると思う。インターンシップの時間を多くすることがいいと思う。

太田委員

都立高専のインターンシップの報告会に参加して感じたが、見てきたものの感想を述べているだけだと思った。自分は今何を見ているのか、どういうポジションのものを見ているのかということが分からないままインターンシップに参加している。

自分がこういうものを作りたいために、そういう研磨の仕方があるんだとか、こういうためにはこういう機械が必要だとか、自分はこういうものを作りたいためにそういう研磨の仕方があるんだとか、自分は、こんなことを将来やりたいからおもしろいものを見せていただきましたと、こういう反応じゃない。教える側、送り出す側もどういう風に学生が学んでくるかということイメージして送り出さないと、インターンシップ効果が薄い気がする

座長

実践をすると興味が出て意欲も出てくる。実感として分かる。また、デュアルシステムを取っているところがあるが、これも実際に体験すると違う。そういう機会を多くしていきたいと思う。

杉山氏

高専卒業生の立場からコメントさせていただきたいと思う。

高専は結構残酷なシステムで、15歳で人生を決めなければならない。高校出て大学に行くか、高専を出てエンジニアのスペシャリストになるか、15歳の時に判断しなければいけないというのは残酷な話で、私もすごく悩んだ。結果、今は良かったと思っている。高専生は人生を決断す

るところで、少し人間力は上がっているのかなと自分なりに思っている。

卒業して私は企業に就職したが、高専卒は、残念ながら劣等感がある。ブランド力もない。20歳で就職し、2年後に大卒と一緒に、4年後に大学院生と一緒に絶対には負けない、勝つ。けれど、給料は違う。そこで、悔しい思いをする。企業の立場からいっても、昇格の仕組みが追いついてない。高専生、大卒、大学院、ドクターと、5年～10年くらい、そこを超えられない。そこから先はその人の人間力で、活躍してとんとん拍子に上に行く、という話になるが。

人間力、提案力。劣等感で悔しい思いをして、そこを克服するのも人間力、「お！高専生すごいな」というのも提案力。これらをどう教育するのか、この場の中で話し合っていくのだと思うが、是非、学生の立場、学生の思いというところも加えてほしい。少なくとも私は5年間卒業するまでの中で、あまりそういう話を先生方とした記憶もない。膝を詰めて話し合う場を設けて、学生と共に「将来像」を策定していけばいいのではないかと思う。

吉野委員

今日、職員の面接をして驚いたのが、産技研に入ってくる職員のほとんどが、最近は学位を持って入ってきているということだ。研究センターは、実はほとんど産業界が相手なので、現場作業、例えば試験をしたり、工場に行ったり、そういうことが多い。専門で入ってきて、すぐにそれを生かせるという人はほとんどいない。入社してから産業界のことをよく勉強して、それで対応していくということになる。その中で、どんどん産業界の勉強をしてなじんでいく人と、あくまで学位を取ってきた専門にずっと生きていく人の二手に分かれる気がする。

現場に行くような人の中で、高専から大学院へ進み、学位を持って入社してくる人が、最近非常に増えてきている。そういう人たちは、現場に行ってもよくなじんでいる、何となくそういう傾向にあると思う。

現場をよく知って、いかに産業界に貢献していけるか、という形に持って行ければいいと、私は思っている。

太田委員

実は、わが社では高専生も大卒と同じ年になると同じ給料になる。あとは本当に実力主義で、大学を出たからといって、本当にセンスがいいかどうかというと、全く分からない。有名大学を出ても、高専生とほとんど差は感じない。

学生の質保証という中で、高専学士力というような表現をしているが、これは諸刃の刃ではないか。良い方に捉えれば、現場力がある。この点は、評価が高いと思う。

高専学士力という内容を現場から積み上げて明確にしていき、学問とマッチングしていく。普通の大学は、理工学部にしても、まず学問、基礎力を学び、学んでからものを見るというような傾向が強いが、そこが明らかに違う。高専の方が実践的で、ものを洞察する力がつく、というようなことを訴えることが、十分に出来るような気がする。

座長

まさにその通りだと思う。実践の上にいるいろいろ習って学問に結びついているという感じがする。

鈴木委員

その実践力の話でいうと、わが社は技術屋の半分強が高専出身である。高専でもロボコンやプロコン等を経験してきた人は本当に実践力がある。それを経験してこなかった学生は、大学生と同じで実践力がない。ロボコンやプロコン等、自分で興味を持って、自分でものづくりを行った学生がそのほかの高専生や大学生と比べてダントツに違う。

大学に比べると高専は、教育の中で実践力を養う場というのが沢山ある。私に言わせれば、クラブ活動のように自由参加ではなくて必須ぐらいにして、全学生が高専にいる間にロボコンやプロコン等、そういうものづくりをやっていくぐらいにしていくと、実践力がすごく上がるのではないかという気がする。教育の授業のカリキュラムの中ではだめだと思う。

村西委員

先ほどから人材像等、独自性という議論しているが、変えないものというか変えてはいけないものについてはその通りだと思う。

先程学校見学をさせていただいた。インフラや過去50年の経験。「時間」や「経験」というのは、代え難い独自性というか、ある意味教育のインフラだと思う。「インフラ」「独自性」、というところを活かして新しいチャレンジをする。今の時代にマッチング、適応していくということに興味を持ち、それがロボコンやエコプロダクツ等につながるかもしれない。

大学が高専化していくとかということがあっても、50年間の過去の実績と先生方のインフラと高専のマインド、そういったところを生かして新しい世界にチャレンジしていく。多分そういうことを人材像や将来像としていくのではないか。「インフラ」や「経験」は、過ぎ去った時間は他のところで真似できない話で、そういうところを強みとして生かしながら、どうやって変えていくかという議論をさせていただきたい。

中村委員

学生を採用する立場として一番期待しているのは、「将来成長してくれる人」というのが、一つのキーワードだ。どういう人が成長してくれるかというのは分からないが、分からない中で模索しながら次世代の人を採用している。

具体的な言葉として「勉強癖のついている人」。今持っている知識というのは明日で終わりだ。勉強癖というのは試験のための勉強ではなく、自分で本当に興味を持ってそのことを実現しようとしたときに、きちんと勉強してそれを実現できるようになる、そういう意味での勉強癖のこと。

自分で課題を見つけて勉強した経験のある人というのは、すごく成長してくれるのではないかと考えている。自分はこんなことをした、という話すネタを持っている人、そういう経験をさせる場を作って欲しいと思う。

今ゆとり教育はすごい批判をされているが、本来は、そういう場であって欲しかったというのがあったのではないか。それが、勉強しないことという言葉に変わってしまっているが。勉強癖をついている人をぜひ輩出して欲しい。

松田委員

若いときに第一志望に入れずに、いろいろな事情でこのような道に進みたくはなかったが進み、志望以外の道に入って成功する人もいると思う。それが人間力ではないかと思う。

企業名で学生が就職を希望するように、高専も人工衛星を挙げているが、学校名を輝かせることで人間力のある学生が集まってくるのではないかと思う。有名な会社は、自ずから優秀な人材が入ってくると思うが、学校も是非そういうところで、がんばってもらいたいと思う。

座長

学校と連携した学生を育成していくことは大事であり、必要だと思う。

田原副校長

企業はCIを作成して会社のイメージを一言で表すことを実施しているが、本校も何らかのフレーズでイメージを表し、それを教員と学生で共有することは大事なことで、広報戦略の基本となる。自分たちの素地を活かして、本校の存在をアピールしていくことが重要だ。

座長

企業は社員が全て同じ方向を向いていないと本当の強みが出てこないと思うが、高専では先生方等の意見を聞くチャンスはあるのか。

田原副校長

学生がどう考えているのか等アンケートも行っている。いろいろな物を通して一体感を作っていきたいと考えている。

鈴木委員

一つ情報提供をしたい。

配布資料の中にも書いてあるが、11月20日に国立電気通信大学でエレクトロニクスコンテストがあり、この高専からも2チーム参加し、大学生に混じって非常に優秀な成績で優勝した。たまたま私は審査員で、そこで感じたことを紹介したい。

電気大には元々はものづくりをする工房を作り、コンテストに出ると単位を与えるという仕組みがあった。それが、学校の組織改革で崩れてきた。特に興味があったわけでもないが、先生に言われたし、今後の卒業研究のためにも経験しておこうか等、大学生は受け身で出場したチームがほとんどだった。

ところが、この高専から参加した学生は、電子工作同好会、愛好会のメンバーの高専1年生、2年生だった。彼らは、自分たちがやりたくてクラブ活動でやっている。だから、テーマの選り方から取り組むときの姿勢、それから物を作って動かすまでの取り組みが、好きでやっているもので、明らかに違いを感じた。

機会を与えられて、授業で先生から課題を与えられ、なんとなく何かやってみました、という感じの人と、クラブ活動で好きだからこれを追求してきましたという人と。それが大学生と高専生という差を、言ってみれば逆転するくらいの力の差を生み出した、という風を感じた。

高専1年生が優勝したが、できあがったものも一番良かったし、プレゼンテーションも一番でき良かった。本当に良かった。そういうことが出来る学生が集まって、そういうシステムを持っているということは、高専の強みだと思う。それをもっと生かすべきだ。

高専には機械系のロボットコンテストがある、ソフト系はプログラムコンテストがある。ところが、電気・電子系というのは、ない。電通大のコンテストのようなものをどんどん勝っていけ

ば自信にもなる。そういったものをみんなで探してどんどんやっていく、そういう活動をしていくと、非常にいいのではないか。本当に立派だった。本校はさすがだと感心して、嬉しかった。

内田座長

そういう機会をどんどん作ってほしい。

皆さま、ありがとうございました。

以上で本日の議題は終了した。

(拍手)

挨拶を校長先生からお願いしたい。

(事務局から次回会議について) 省略

荒金校長

大変貴重なご意見をたくさんいただきありがとうございました。

将来どういう学生を育てるかを常に考えているが、今日拝聴したご意見は基本だと思う。ものづくりが好きな人間を集め、実際ものを作らせ、本当に勉強好きな人間を育てるといふ、基本的なところが一番重要だと思う。

このあと座長・副座長と話し合いながらまとめたものを、来年の7月にご意見をいただき、最終的にこの委員会からの報告書、提言書という形にまとめたいと思う。

本当に今日はどうもありがとうございました。

以上